

受難節第4主日 説教 「身も心もすべて」要旨

牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2024年3月10日

マタイによる福音書 22:34-40

受難節第4主日の朝を迎えました。主の御苦しみを覚えつつ歩んだこの一週間、祈りの中に様々な気づきを与えられたことと思います。そして、その中で最も大きなものは、自分以外の他者との関わりにおける様々な破れについてでありました。それは、神と共にあるだけでなく、人とも共にあるのが私たちであるからです。ただ、他者との関わりにおける破れと言いましても、それは、人と人との対立だけを指すわけではありません。今週は幼稚園の卒園式がありますが、これまで普通に毎日会っていた子どもたちと別れねばならないということも、その一つであるのでしょうか。それだけではありません。もっと深刻なものは愛する家族との暮らしに大きな変化をもたらす病と死です。それは、この病と死がそれまで過ごしてきたところとはまったく違うところに私たちを連れて行くからです。それも、こちらが望まない形で連れて行くとする、しかも、それは、突然訪れ、人と人との決定的な形でダメージを与えるのです。ですから、そこで私たちの心に浮かぶことは、愛し、愛される関係性のもろさと、それゆえの疑いです。しかし、そうであればこそ、私たちはまた思い出すのです。それは、愛することの、愛されることの、この愛ある関係性の貴さとその豊かさを。

そして、それを私たちに教えてくれているのが聖書の御言葉でもありますが、そこで私たちは、実に様々な御言葉を思い起こします。その一つが、「愛の讃歌」と言われているコリントの信徒への手紙一 12:31以下の御言葉です。それは、破れを感じざるを得ないその時、私たちは自分の気持ちに溺れ、それゆえ、沈み込み、また自分の心に深く閉じこもってしまう者でもあるからです。しかし、その一方で、このままでは終われない、いや終わってはならないと、その時、私たちはまたそう思うのです。それは、愛の貴さと豊かさを深く心に留めているからです。「愛の讃歌」の最後のところに「それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中

で最も大いなるものは、愛である」とあるように、「最も大いなるものが、愛である」ことを知っているからです。そして、それは、破れに直面する私たちが、祈りの中に、御言葉が語る愛をこれまで経験してきたからです。従って、主の御苦しみを覚えつつ歩むこの時、私たちがイエス様の愛を、この御言葉の語る愛の貴さと豊かさを思い出さずにはいられないのは、私たちが主の愛を実際に経験してきたからです。

ですから、この日、このマタイによる福音書 22:34以下の御言葉が与えられているのは偶然のことではありません。すべては神様の御心ゆえのことでもあるのです。そして、その御心とはつまり、神様が私たちと共にあるということです。それゆえ、私たちが十字架へと向かうイエス様とを共にあるのは間違いありません。では、その私たちに向かって、神様はこの日の御言葉によって何を語り聞かせようとしているのか。それは、常に様々な破れの中を生きるしかない私たちの大切にすべきもの、それが神様への愛と隣人への愛であるということです。イエス様が「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして」と神様への徹底した愛を語り、また、「自分のように」と隣人への誠実な愛を語るのは、この愛こそが、人が人として歩む上でのすべての土台であるからです。破れに直面する私たちが、御言葉が語る愛を思い出さずにはいられないのはそのためです。それゆえ、イエス様もまた、この愛をただ思い出せ、ただ考えよなどと、通り一遍の形でこの言葉を終わらせようとはなさいません。「最も重要な掟」としてこの愛を語るように、神様への愛と隣人への愛を具体的な形で現すよう私たちに求めるのです。それは、この愛を極限まで突き詰め、この愛に徹たのが、私たちと共にあるイエス・キリストというお方であるからです。

従って、イエス様の生きたこの愛を貫くことが私たち人間にとっての生きるということであり、生きていくということでもあるのです。それゆえ、イエス様の十字架は、この世における愛の実践がいかなるも

のであるかを、そのすべてを私たちに明らかにしてくれています。なぜなら、御言葉の求める神様への愛と隣人への愛は、十字架に向かう、この神様の独り子の姿を通して、一つの形として示されているからです。そして、そのイエス様が十字架につかれるその直前、そのイエス様が弟子たちに向かって仰ったことは「互いに愛し合いなさい。これが私の命令である」ということでした。つまり、愛とは、一方的なものではないということです。互いにと言われたように、双方向のものでなければなりません。それゆえ、このことは、御言葉が神様の造られたこの世界に向かって語られていることを考えれば、あらゆるところで、あらゆる時に、つまり、神様の造られたこの世界においてはそのすべてにおいて適用されるべきものだということです。

ただ、イエス様の十字架だけを見ていくときにはどうでしょう。そこには、確かにイエス様の徹底した神様への愛、私たちの罪を贖おうとする隣人への愛が、つまり、私たちがなりの言い方をすれば、その強い確かな信仰というものを見ることができません。けれども、そこに双方向の愛の姿を見ることができるのでしょうか。十字架は陰惨で、私たちの心に暗い影を落とすものです。だから、十字架なんだと言ってしまうとそれまでのことでもありますが、けれども、私たちは間違いなく、この陰惨なものの中にイエス様の十字架の確かさを見ているのです。それは、イエス様の父なる神様が、十字架の後にはっきりと、神様の愛の確かさをお示しになったからです。それがイエス様の甦りであり、復活です。従って、十字架と復活の出来事は、御言葉の語る愛と同一地平線上のものだということです。なぜなら、私たちの罪を背負い、人の子として神様への愛と隣人への愛に徹し生きたイエス様のことを、神様は陰府より引き上げ、罪多き人に、また罪あるこの世に、神様の愛が双方向のものであることを明らかにされたからです。

そして、それがイエス様の十字架と復活の出来事でもあります。従って、御言葉の語る愛が、通り一遍の、それこそ言葉の上だけで終わらないのはそのためです。つまり、私たちがどれほど見る目がなかったとしても、神様の御心はそれでそのまま終

わるものではない、神様とイエス様の愛に生きる私たちにとって、愛が具体的なものであると言えるのは、そのままで終わらないものであることを私たちが知っているからです。愛が私たちの生きる現実そのものだと言えるのはそのためでもあります。ところが、エルサレム入城の直前のことです。そこでイエス様の仰ったことは「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は、祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して、異邦人に引き渡す。人の子を侮辱し、鞭打ち、十字架につけるためである。そして、人の子は三日目に復活する。」ということでした。このことはつまり、私たちに向けられた神様の愛とイエス様の愛とを、事前に情報として掴んでいたのが私たちであったということです。従って、この事実ゆえにまた、十字架と復活の出来事はもう一つの別の意味を持つことになったのです。

先ほども申し上げたように、愛とは双方向のものであって、一方的なものではありません。ところが、十字架と復活の出来事が示す愛は、神様とイエス様にとっては双方向のものであっても、私たちと神様という視点に立つなら、それは、一方向のものでしかなかったのです。なぜなら、イエス様からの愛を日々受け、共に過ごした弟子たちも、また、イエス様の愛を遍く与えられた世の多くの人たちも、十字架はただ見つめるだけのものであり、その後のことに思いを馳せることなど到底できることではなかったからです。このことはつまり、イエス様の真意、神様の御心を情報としては知りつつも、イエス様のその愛に応える者、応えうる者は誰一人としていなかったということです。ただ、このことはまた、別の意味で、十字架を見つめる人たちが神様とイエス様の愛に応えたとも言えるのでしょう。それは、十字架が御心であり、この神様の御心に従うなら、避けるべきものではなかったからです。しかし、イエス様に愛され日々歩んだ人々は、そのように考えることはありませんでした。愛に応え得なかったと、それぞれが自責の念に駆られながら、復活までの時間を空しく過ごすしかなかった、それが、主が愛した、また、主を愛した人々の姿であったのです。

そして、恐らくは、いや、間違いなく、

私たちは、それらの人々の姿の中に自分自身の姿を見つけることができるのです。自分は違う、自分はそうではないと言えいほど、イエス様のことを拒んだあのペトロと自分自身とが重なって見えてくるのです。それゆえ、十字架と復活という神の国の奥義を知った私たちは、イエス様と、その独り子を十字架に懸けた神様の御心を思うなら、神様とイエス様の愛が一方向のものとならないように気をつけ、神様と隣人を愛すべく日々過ごさねばならないのです。特に、主の御苦しみを思い起こしつつこの時を過ごす私たちの考えることはそれに尽きるようにも思うのです。しかし、そのことを心に留めつつこの一週間を過ごし、今、神様の御前に置かれた私たちの思うことは、冒頭で申し上げたように、他者との関係性の破れであり、破れたことへの様々な理由付けであるのでしょうか。つまり、人を責め、自分を責め、挙げ句の果てには神様とイエス様を責めずにいられない、それは、愛が双方向のものではなく、一方向のものだと思っているからです。しかし、私たちはそうであったとしても、十字架と復活の出来事が示すように、神様はそうは考えません。私たちのように急ぎ答えを求めることはないからです。けれども、私たちはそうではない、弟子たちがその間もあれこれ考え、考えるだけでなく、身の安全を確保すべく、十字架から逃れ、その安心安全を求めたように、それがイエス様を愛し得ない、その愛に応え得ない者の姿なのです。ですから、私たちがその中の一人であることを考えるなら、イエス様の仰る「最も重要な戒め」を私たちが深く心に刻み、イエス様と同じように愛に徹する生き方をすることにはなおのこと重要な意味を持っているように思うのです。それは、この掟を守ることで私たちは間違いなく変えられていくことになるからです。つまり、イエス様を愛し得ない、その愛に応え得ない私たちが神様との双方向の愛に生きるものとされるからです。

しかし、そこでまたよく考えたいのです。この最も重要な掟と言われていることを、完全な形でやり遂げた者を私たちは何人知っているのでしょうか。掟と言われている以上、やろうとした者はそれこそ数え上げられないくらいいます。しかし、それ

を実際にやり遂げた者は何人いるというのでしょうか。それは、私たちの多くは実際に愛に徹することができないからです。自分の手を離れる子どもたちの姿を、あるいは、神様の御許に召される人々の後ろ姿を、すべてが御心であると思いつつも、そのすべてを喜ぶことのできない、私たちの思う愛というものの中には、そのような身勝手にエゴイスティックな一面を兼ね備えているのです。まただから、御言葉は愛というものを、エロース、フィリア、アガペーと、三つに分けて考えるのです。そして、イエス様がここで掟として求める愛は、その中のアガペーに分類されるものでもあります。ただ、愛というものが抽象的な一つのものの考え方ではなく、行動を伴う具体的なものであることを考えれば、これとこれがアガペー、これとこれはフィリア、そして、これとこれがエロースと分けることは、はたして実際的なものとなりえるのでしょうか。それが実際的なものとなるには、はっきり分けてもらわなければ、なかなか分かるものではありません。また、仮に分けることができたとしても、近い関係性においては、どこまで実効性を持つのだろうかとも思うのです。ですから、ファリサイ派の人々がイエス様に向かって「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか」と尋ねているのは、分からない話ではありません。

彼らがイエス様にこう尋ねているのは、彼らも本当に困っていたからです。それは、彼らが御言葉によって神様と近い関係性にあろうと努めていたからです。そして、その彼らにとって、神様との近さとは、生真面目に、徹底的に御言葉に生きることでもありました。そんな彼らに向かって、イエス様は神様の求めるところを要約する形で、「最も重要な掟はこれだ」と語ったわけですが、それは、神様との近さというものがどちらか一方に偏るものではないからです。なぜなら、神様に近いということは人とも近く、人と近いということは神様にも近いということだからです。ですから、イエス様がここで仰るアガペーとは、このようにその双方向のものでもあるのです。ただ、罪というものが神様から離れた状態を意味することを考えると、罪ある私たちが神様と人との近さをどのように

現せばいいのでしょうか。そもそものところで罪人である私たちは、神様と、そして、イエス様とも敵対しているとも言えるわけですから、イエス様がここで仰る掟に従ったとして、どこまで結果はついてくるものなのでしょうか。つまり、最も重要な掟と言われていることは、大半の人々にとっては重要だということは分かっている、そもそものところで、それを完全に行える者はイエス・キリストというお方をおいて他には一人もいないということです。ですから、それでは、分かっただけでそれで終わりということもになりましょう。また、ならば掟なんて意味がないじゃないか、ということにもなるのでしょうか。では、イエス様はそんな身も蓋もないことを一番重要な掟として語っているのでしょうか。

私たちの中でも、時折、掟なんて、規則なんて、戒律なんてという声が聞こえてくることがありますが、それは分からない話ではありません。しかし、私たちの、掟という言葉に対する抵抗感には、少し誤解があるようにも思うのです。それは、戒め、掟と言われていることは、私たちを窮屈で偏狭なところに意図的に恣意的に閉じ込めるためのものではないからです。むしろ、その反対です。神様の御心という広いところに私たちを置くためのものであり、それが掟として語られていることの中身なのです。まただから、イエス様は別のところで、「私が父の掟を守り、その愛に留まっているように、あなたがたも、私の掟を守るなら、私の愛に留まっていることになる」とこう仰るのです。つまり、掟とはその言葉を一字一句違わず守ることがその目的なのではなく、その守るべき理由は、私たちがイエス様の愛に留まるためなのです。イエス様のいますところに私たちもいる、それゆえ、神様とも近く、また共にある人々とも近いということなのです。なぜなら、神様と人とを近いものとして繋いでくださっているのが私たちのイエス様であり、そのイエス様と私たちはこうして共にいるからです。そして、このイエス様のいますところに置かれているものが神様の愛であり、ですから、イエス様が掟と仰っていることは、校則のような誰が決めたのかも分からないような、そんないい加減なものではありません。掟とは、神様が共にい

ますリアリティーそのものを表す言葉であり、その愛を現に受け、分かち合う関係性に私たちは生きているということなのです。

ですから、私たちの心すべきことはそれをやるかしないか、それができるかできないかではありません。神様が共にいますリアリティーの中を私たちが生きている、そこに留まっている、ここに自分自身を立たしめることなのです。つまり、掟を守るということは、この事実とその身を、その心をしっかり刻みつけるということなのです。なぜなら、イエス様の十字架と復活の出来事とは、神の愛のただ中に、罪ある私たちを招き、実際に置く出来事であるからです。十字架と復活の出来事が神様の赦しであり、救いであると言われているのはそれゆえのことであり、ですから、その罪ゆえに破れを感じたとしても、そのこと自体に恐れる必要はありません。罪を深く自覚し、悔い改めて、共にいますイエス様の導かれる方向に向かって歩むなら、必ず道は開かれることになるからです。ただ、場合によっては、それが茨の道と感じさせられることもあるのでしょうか。けれども、その私たちとイエス様が共にいまし、御心にふさわしく導いてくださっているのです。それは、私たちが何かをしたからしないからということではなしに、主が共にあるところに私たちが生きているからです。

ですから、私たちが神様を愛し、同時に隣人を愛するということは、自分が何者であり、どういう場所にあるかを神様のリアリティーの中で知らされ、また知ることなのです。それゆえ、愛し、愛されるという関係性は、互いにしがみつき合い、また縛り付け合うものではありません。大きな信頼関係の中に置かれることであり、それを深く心に留めることなのです。ですから、そのことをもう一度心に深く留めて、それぞれの置かれたところで安心して主の愛を現し、また生きる私たちでありたいと思います。祈りましょう。